

## 2. 国宝沖ノ島出土品の保存活用計画について

福嶋 真貴子 宗像大社文化局

### (1) はじめに

国宝「福岡県宗像大社沖津宮祭祀遺跡出土品 伝福岡県宗像大社沖津宮祭祀遺跡出土品」(以下、「国宝沖ノ島出土品」とする)は、宗像大社の神体島沖ノ島(福岡県宗像市)で行われた古代の国家的祭祀の際に奉獻された品々で、宗像大社復興期成会による復興事業の一環として昭和29(1954)～46(1971)年に実施された三次の学術調査の出土品と、学術調査時以外に島内で不時発見され諸事情で宗像大社辺津宮へ移され保管されてきた伝世品から成る。本国宝の数は8万点に上り、宗像三女神信仰や三女神を奉斎した古代豪族宗像氏の歩みを解き明かすものとして、また、わが国固有の信仰や古代大和政権の国づくり・対外交流などにおいて歴史的・美術的価値をもつものとして学術的に高く評価されている。

宗像大社は令和4(2022)年度から2ヵ年計画で、国宝沖ノ島出土品の保存活用計画を策定、令和6(2024)年3月に『国宝 福岡県宗像大社沖津宮祭祀遺跡出土品 伝福岡県宗像大社沖津宮祭祀遺跡出土品 保存活用計画』(以下、「国宝保存活用計画」とする)を刊行し、同年10月、本計画は国宝考古部門の保存活用計画の第一号として文化庁から認定を受けた。本稿では、国宝保存活用計画について、その概要を報告する。

### (2) 計画策定の経緯と目的および体制

国宝沖ノ島出土品は、昭和34(1959)年の指定から60年以上経過し、近年、保存管理の上でさまざまな課題が生じてきた。保存処理は昭和56(1981)～平成4(1992)年の修理事業で行われたが、金属製品を中心に経年劣化が進んだため、平成27(2015)年から再修理事業に着手しており、まだ劣化が見られる金属製品が残っている。また、昭和55(1980)年に竣工開館した宗像大社神宝館(以下、「神宝館」という)で収蔵・展示し活用を図ってきたが、竣工から40年以上経ち、環

境面等の改善をはじめ、より適切な保存管理の必要性も高まっている。さらに、平成29(2017)年に『神宿る島』宗像・沖ノ島と関連遺産群」として沖ノ島を含む境内地全体が世界遺産に登録されたことを背景に、国宝沖ノ島出土品は資産の意義を理解しうる重要な文化財として、長年にわたる研究成果に加え、現在の水準での調査研究による新たな成果も求められるようになってきた。

そこで、宗像大社は、本国宝を信仰の尊厳を保ちつつ学術的に有意義な形で後世へ確実に継承できるよう、適切な保存管理および活用等の基本指針を定めるため、保存活用計画を策定した。

計画策定では、宗像大社が主体となり、国宝沖ノ島出土品保存活用計画策定委員会を設置、文化庁、福岡県、宗像市の指導・助言を受けた。また、保存・管理、調査研究、活用、施設整備の専門家の現地指導による助言も得た。

### (3) 計画の特徴

本計画の特徴として、まずは、国宝沖ノ島出土品保存修理事業の一端で策定した経緯から、保存修理に重点をおいてまとめている点があげられる。平成27年度からⅢ期10ヵ年計画で実施している再修理事業で判明した「課題」はもちろん、「保存・管理」の「方針」や「方法」を述べる箇所では、保存修理の対象品、期間、方法、保存修理計画表(案)など、令和6年度以降、Ⅳ期～ⅩⅢ期までの35年間に亘る壮大な保存修理計画を明記している。

今後35年間つづく保存修理事業の方針において対象品の優先順位と選定基準を明確にした点、保存修理方法において作業記録の作成や空気質への配慮などを新たに加えた点は重要である。

次の特徴として、調査研究を本計画の重要な構成要素としている点があげられる。本計画は保存修理に重点をおいているが、保存修理に連動する調査研究を敢えて単独で章立てした。

宗像大社は、保存修理には、国宝沖ノ島出土品の学術的な再整理・再評価作業が必要と考えている。具体的には、国宝を現代の学術水準で精査、再分析し、基礎的に整理し直して、最新の学術的価値を与える作業である。国宝沖ノ島出土品は、カットグラス碗をはじめ、金製指輪や金銅製龍頭、鏡、馬具、雛形品などの金属製品、玉類、滑石製品、土製品等に大別される。沖ノ島国家祭祀の奉納品ならではの稀有な特注品、特異な祭祀具が多く、他の遺跡から出土しない特殊な製品も膨大にある。これらを現代の視点で学術的に種別し、表裏・部位等の確認をして修理処理することが望ましく、その実現を目指している。逆に、保存修理をへて初めて得られる学術的知見をもって本国宝に新たな意義が付加されることもあるだろう。本計画では、保存修理と調査研究は、常に連動しきり離せないものとして位置付けまとめている。

さらに、本計画では、「返納品」や「流出品」といった沖ノ島祭祀遺跡出土と伝えられる資料や、沖ノ島祭祀遺跡の遺構に関しても、国宝沖ノ島出土品に関わる重要資料として扱っている。「返納品」は、昭和 26（1951）年から約 20 年行われた沖ノ島の築港工事の際、工事に携わった作業員が島内で拾い持ち帰った遺物が宗像大社へ返納されたものをさす。一方「流出品」は、陸海軍部隊が駐屯した昭和 10 年代や、前述の築港工事など、神職以外の往来が激しくなった際に、島外へ流出した遺物をさす。これらの製品や遺構は、「保存・管理」や「調査研究」の箇所で、台帳化されるべきもの、整理・調査研究の対象とすべきものとして取り上げられている。

#### （4）計画の構成と内容

本計画は、史跡の保存活用計画に倣い、国宝沖ノ島出土品の指定にかかる経緯と基本情報、本質的価値を述べた後、「保存・管理」「調査研究」「活用」「施設整備」「運営・体制」の現状と課題、大綱と基本方針（表 1）、方針の詳細と方法、施策の実施計画、経過観察をまとめ、資料編として関係法令を収録した。

保存・管理	信仰の証であり、学術的意義を有する国宝沖ノ島出土品を確実に後世に受け継ぐため、保全を確保しつつ、調査研究と活用に対応した保存管理を行う。
調査研究	国宝沖ノ島出土品が信仰の証であることに留意しつつ、沖ノ島祭祀の全貌解明のため、現在の学術水準による調査研究を継続的に実施し、グローバルな研究へと発展させる。
活用	国宝沖ノ島出土品が信仰の証であることを尊重しつつ、重要な歴史的価値、学術的価値を正しく後世に伝えるため広く国内外の教育・学問・観光等の場で活用する
施設整備	国宝沖ノ島出土品を守り伝えるために、現在の課題に適切に対応し、保存活用施設の新規整備に向けた検討を進める。
運営・体制	宗像大社、文化庁・福岡県・宗像市など関係機関が、相互理解を深めながら円滑に適切に連携し、国宝沖ノ島出土品の保存・管理、調査研究、活用、施設整備に取り組む。

表 1 国宝保存活用計画の基本方針

#### （5）おわりに

国宝保存活用計画が国宝の考古部門の計画として初めて認定を受けた。宗像大社は、今後、本計画を広く共有し、関係部局と連携して課題を堅実に解決しながら、信仰の尊厳を保ちつつ、学術的に有意義な形で文化的価値を後世へ継承したいと考えている。それは、保存修理と調査研究を主体とし、その成果を活用していく形を紡いていくことである。その実現へ向けて、保存活用施設の新規整備に向けた検討も進めていく必要があるだろう。

守り、伝えることは保存修理や管理の充実だけでは成り立たない。調査研究で学術的意義を積み重ねていくことが不可欠である。近年、沖ノ島の調査研究は、現代の最新技術を用いた多角的・世界的な研究が進んでいるが、今後は、基礎的な視点に立った調査研究、特に、国宝沖ノ島出土品の再整理・再検討が何よりも重要になってくる。

本計画は、100 年後、その先も続く未来へ、本国宝の文化的価値を深めて確実に継承していくためにあると確信している。